

# 継承語教育を考える ～ワークショップ参加報告～

校長 近藤 崇子

今年八月、東京の桜美林大学にて「母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会」の二〇一〇年度研究大会が開かれ、本校より相賀先生が全日程に、大会最終日に開催された「第四回継承語教師養成ワークショップ」には、私も相賀先生とともに参加しました。

そのワークショップでは、幼稚部から教育課程に系統だった言語教育プログラムを組み込んで実施している補習校は、世界でも本校のみ(!)ということで、本校の幼稚部言語教育の取り組みを相賀先生が実践報告として発表しました。そもそも、継承語というのは、家庭で親と話す言葉であり、親から子へ受け継がれていく言語のことです。居住している国の言語と家庭で親と話す言葉が異なる、本校の子供たちは、補習校という場を通して継承語を学んでいることとなります。また、世界共通して、国際結婚などを理由に長く外国に居住する子女が増加しており、それらの子女に対する「国語教育」も多様なニーズに対応することを余儀なくされています。日本の学校で行われている「国語教育」を単にまねて外国で実施するのではなく、もっと子供たちに必要な教育とは何なのか、継承語としての日本語を確立させて、バランス・バイリンガルを育てるためにはどうしたらよいのか、あらためて考えさせられるよい機会でした。

バイリンガルとは『聞く・話す』能力だけではなく『読む・書く』という側面もバランスよく見について完成されると言われています。従来、一つの言語をまず確立させることがバイリンガルの育成として正しいとされてきた学説も、最近では見直されてきています。それは、複数の言語で育つ子供たちが、その言語間で認知面、読解力、作文力などで転移を行い、両言語間に依存性があるということが研究の結果として表れているからです。今まで別々だと考えられていた言語構造は、表面下では繋がっているという考え方に変わってきています。そして特記すべきは、バイリンガル環境で育った子供たちには、プラスαとしての比較、思考分析能力、創造力が大きく作用すると言われていることです。継承語学習は、現地校の学習にも役立つのです。

しかし、このバイリンガルは二十代前半までかかって完成される、長いプロセスであるというのも事実のようです。それ

まで、年齢相応の認知活動を両言語バランスよく与えなければなりません。そして、学習面だけではなく、マイノリティ的立場にある子供たちの前向きな自己イメージ作りやアイデンティティーの問題など、補習校の教師にはトータルなケアが求められる、ということが中島和子先生(トロント大学名誉教授、桜美林大学言語教育研究所客員研究員、MHB研究会会長)の基調講演でなされました。

ワークショップでは、中島先生の基調講演の後、プリンストン日本語学校の「永住型児童生徒の特質を踏まえたカリキュラムの枠組み」として具体的な取り組みが発表されました。印象に残ったものとして、第二次世界大戦を題材にした「平和と共生」が挙げられます。その学習で日米国際児の生徒は「真珠湾の時はアメリカに申し訳ないと思うし、広島では日本に申し訳ないと思ってしまう」と発表しています。そして、現代社会との関連付けでは「自分ができることとして、知ったことを伝える責任があると思う」と述べているのです。二つの国の環境で育った子供として、両方の立場を学ぶことができる、ということこそ、今の世界では必要なことなのではないでしょうか。

その他、「トロント補習校における日英バイリンガル作文調査」の発表など、様々な試みの発表がありました。そして、本校の幼稚部言語教育の取り組みが発表され、0歳児から言語を意識した学習カリキュラムを実施している本校は、とても注目を集めました。

継承日本語教育は、歴史は長いのですがデータの少ない分野だそうです。まだまだ模索段階といってもいいかもしれません。本校でも、今年度は一学期に全校対象の「言語調査」を実施いたしました。その調査を分析し、今行われている授業の形態・内容が適切なのか、問題点はどこにあり、どう改善していくべきか、を検証しながら今後の教育活動を考えていきたいと思っています。

このように、世界の補習校での取り組みやバイリンガル教育の研究発表を知ることができ、他校との情報交換などもできるワークショップに参加させていただけたことに、心より感謝いたします。ここで学んだことをもとに、今後も本校の教育を充実させるべく、決意を新たにいたしました。